

14) 福澤諭吉の寓言『かたわ娘』(明治5年刊)

On the Ironical Narrative "Fault Daughter" Written by Yukichi Fukuzawa at 1872

医の博物館 樋口輝雄

Teruo Higuchi, *Museum of Medicine and Dentistry*

明治5年に刊行された福澤諭吉の『かたわ娘』をめぐり、翌6年の東京日々新聞紙上で、論議が沸騰した。まず1月11日号で「かたハむすめと名[づ]けたる福沢氏の著述刊行准許なるべし、之を許可とせば政府に於ても異論無かるべし、之を読む者誰か異論あらん……男子散髪勝手の令ありて其便なるを知り、今剃眉染齒令、有[れ]ば始めて其かたはをしらん、偏に望む、政府の一言の令を以[て] 婦人剃眉染齒を禁止せられん事を」との投書があり、次いで1月21日号では、「洋学一寒生」より、「剃眉涅齒」の習俗を喜ぶのではないが、今までも「世風を妨げ人体に害ある」わけではなかったので、「各其意に任せ漸を以て自ら蛾眉皓齒の美を知る時を俟て可なり……瑣尾を説て政府の煩はさんとする者の爲、聊[か] 辨するに、開化の本状たる固より容貌に非ず」との反論があった。続いて2月5日号にも投書があり、2月11日号では、前号までの三論への所感を述べた後、「餘ハ茲に染齒の風習より尚速[か] に改良すべき事あり、婦女の髪飾是なり……櫛笄の職工ハ轉業して西洋器械等の事に従事せば開化進歩もまた速[か] ならん」との投書が掲載された。

石井研堂の『増訂明治事物起源』(大正15年)「婦人白齒の始」の項には、「……されども守舊家の、之を冷評するもありき。六年一月廿一日[日々]の投書に『頃日新聞紙を閱するにカタワ娘(研堂曰く、福澤氏の著書の名にて、婦人のかねを付くるは、人工カタワたることを論ぜし小冊)といへる書に因て、婦人剃眉涅齒の禁令を望む者あり、……福澤子の糟粕を嘗めて、無益の言を費す者といふべし』と嘲れり」とあり、この一節が『よはひ草』にも転載された。私見では、1月21日号の「洋学一寒性」からの投書は、石井研堂が言うように「守旧家」の論とは思えないが、この「婦人白齒の始」の一節が、諸家の著書に引用されている。また、『かたわ娘』の原文については、田中克憲氏の近著『醫學史齒科醫學史を求めて』に、『福澤諭

吉全集第3巻』(昭和34年)から、その一部が抄されている。

現在、国立国会図書館に『かたわ娘』の原本が所蔵されており、紙数5丁、変体がなで綴られた1800字たらずの同冊子は、「或る富家に女子誕生し、かほかたち申分なく、玉の如き子なれども、生まれつき眉毛なし。初生のことなればかくべつ人の目にもつかず、おひおひ月日をおくり、はや八、九ヶ月もたち、前齒一、二枚づゝはへけるに、その色黒し。……初生齒ものこらずぬけかはりしに、両親の案に相違し、二度目の齒ハますます黒くして、墨の如くうるしの如し」に始まる。近所では、娘の眉毛は癩病の筋だ、親は代々たどん商売で黒いたどんを高く売り白い飯を食った報いか、借金の断りに行ったとき、いつもふくれ面をして白い齒を見せたこともない因果だろうと噂していた。ところが、この娘が20歳頃になると噂する者は誰もいなくなった。それは、隣の細君は剃刀で眉毛を剃り、ふしの粉を用いてお齒黒をつけるのに、この娘は生れつき剃刀やお齒黒を用いなくても、世間のかたわに仲間入りできた。そして、「実に不思議なるハ世間の婦人なり。……天然に具はりたる飾をバ、をしげもなく打捨て、かたわ者の真似をするとは、あまり勘弁なきことならずや。まして身体髪膚は天に受けたるものなり。慢[り]にこれに疵付るハ天の罪人ともいふべきなり」と結んでいる。

この『かたわ娘』は、「剃眉涅齒」そのものを論じたというよりは、旧習に題材を藉りた痛烈なアイロニーであつたのだろう。「近代化=西欧化」を一途に志向した福澤諭吉の寓言は、開化・因循の論が喧しい明治初年の世に多大な反響を呼んだに違いなく、翌6年2月には、西村雪台により『殘癘篤子息(かたわむすこ)』なる書も刊行されている。なお、演題ならびに本抄録で、現在では不適切とされる用語を使用した。演者は、文献資料としての歴史性を重んじたことを付記する。